

## 視点の転換 —二人称のすすめ—

副会長 葉原 耕平



電話交換の初期いわゆる手動の交換台が使われていたころ、ユーザは交換手に「角のそばや」というだけでつないでくれた。ところが、いわゆる“自動交換機”が導入されて以来ユーザは手でダイヤルを廻さなければならなくなり、ユーザにとっては“自動”式は“手動”式ということにあいなった。このように“自動”という言葉はネットワークの運用側あるいはキャリア側の見方であって、ユーザ側の見方であるとはいえない。

同じようなことは自動販売機、自動改札機などにもいえる。サービスの提供側とユーザ側の立場を変えると“自動”とか“手動”とかいう言葉は再検討されねばなるまい。これは、我々が将来を考えると発想の転換が望まれる一つのポイントであろう。もちろん、私はこれまでのいわゆる“自動化”が間違っていたといたいのではない。自動交換機なしでは今の電話社会はあり得なかったし、自動改札機によって鉄道運営のコストも下がるであろう。つまり、自動化によって得るものも大変多い反面、「角のそばや」というような人間味のあるやりとりのように失ったものもあるということである。これからの情報社会に向けては、サービスの提供側からユーザ側つまり一人称から二人称側に視点を移して考えてみるのがより大切になるということである。

ひるがえって、電子情報通信学会、特に会誌のユーザはだれであろうか。それは間違いなく読者である。記事というプロダクトを読者というユーザに、いかによい品質でかつタイムリーに提供するかという観点からは、世の中の商品となんら違いはない。とすると、technology-drivenのみでなくユーザのニーズに合わせた managed, market-oriented なスタンスも望まれよう。現に、本学会では編集理事さん始め関係者の努力でそうなっていると私は理解している。あとは、著者一人一人が常に品質向上に努めることであろう。

そこで私のささやかな経験をもとに、品質向上のため手近でかつすぐに実践可能な一方策として、この二人称の実行をお勧めしたい。つまり、例えば大学院生レベルを対象とする記事であれば、少なくとも二人称の立場にある大学院生とか同等の新入社員などに原稿を実際に読んでもらって具体的な意見を求め、推敲の参考とすることである。「隗（かい）より始めよ」のことわざどおり、この原稿もまず若い人に見てもらった。そうしたら、「全体に文章が古くさい。それに、「隗より始めよ」とはどういうことですか？」といわれてしまった。難かしいものである。